＜資料＞

若きゴフマンの知的生活誌
―高等学校時代と大学時代―

薄井　明*

抄　録：セント・ジョンズ技術高等学校時代、アーヴィング・ゴフマンは「数学の天才」「自然科学の天才」と渾名されるほど理数系科目で並外れて優秀な生徒だった。進学したマニトバ大学でも最初の二年間は「化学」を専攻したが、第三学年で専攻を「哲学」に変更した。翌年「徴兵」問題のため大学を中退し、その後カナダ国家映画委員会で勤め始めた。この頃、A･N･ホワイトヘッドはゴフマンに影響を与えた主要な人物であった。D・ロングの勧めで籍を置いたトロント大学においてゴフマンは、デュルケムやパーソンズの著作を通じて社会学的なパースペクティブを確立していったほか、バードウィステルの「動作学」理論やフロイトの精神分析によって、人々の外見や振る舞い方がもつ社会階層的および対人関係的な意味に対する社会学的な識別力を養っていった。

キーワード：アーヴィング・ゴフマン、知的生活誌、セント・ジョンズ技術高等学校、マニトバ大学、カナダ国家映画委員会、トロント大学

1．はじめに

本資料は、ゴフマン研究において従来ほとんど光が当てられなかったシカゴ大学修士課程以前のアーヴィング・ゴフマンの知的生活誌を叙述する試みである。

E・ゴフマンの知的生活誌を詳細に調べ上げた先駆的な業績としてY・ヴァンカンの作品（Winkin 1988）が有名であるが、全体で約80頁（1頁は40行弱）の記述のうち、セント・ジョンズ技術高等学校時代の記述[1]は14行、マニトバ大学時代の記述にいたってはわずか5行しかない。カナダ国家映画委員会時代とトロント大学時代はやや詳しく記述され、それぞれ約3頁と5頁余りである。これに対して、シカゴ大学に関しては、修士課程の記述だけでも25頁を超えている。

こうした記述量の差は、資料の多寡の結果とみることもできるが、ゴフマン社会学の形成過程において“社会学の名門校”シカゴ大学時代の影響を過大に評価する研究姿勢の反映である可能性も指摘できる。逆にいえば、シカゴ大学以前の時期が過小評価されているのではないかということでもある。

シカゴ大学の前にゴフマンが籍を置いたトロント大学時代、さらにその前に彼が在学していたマニトバ大学時代。これらの時期に筆者が着目するのは、単にその実態が未解明であるからではなく、そこにゴフマン社会学の理論的バックボーンの“秘密”が隠されているのではないかと目しているからである。マニトバ大学時代とその前後のゴフマンの知的経歴に関しては、以前から、彼が「大学で化学を専攻していた」ことや「ホワイトヘッドの著作を読み込んでいた」ことなどが断片的に指摘されてきた。しかし、若きゴフマンのこうした知的な面が、後に彼が構築した社会学と理論上どのような関係にあるのか、という問いが立てられることはなかった。

この問いに答えていくため、その予備的作業として、本資料では、従来のゴフマン研究の適否を吟味しつつ、ゴフマンの関係者の証言や状況証拠をつなぎ合わせることによって、技術高等学校時代からシカゴ大学修士課程入学前までのゴフマンの知的生活誌を、ある程度の詳しさをもって、描き出していく。

2．シカゴ大学以前のゴフマンの知的生活誌

（1）セント・ジョンズ技術高等学校とマニトバ大学

アーヴィング･ゴフマン（Erving Manual Goffman）は、

＊大学教育開発センター

ともにウクライナ出身のユダヤ人の移民であった父マックス（Max Goffman）と母アン（Anne）の第二子としてカナダのアルバータ州マンヴィルで1922年６月11日に生まれた。アーヴィングの上に1919年生まれの姉フランセス（Frances）[2]がいた。父マックスは、最初マンヴィルで店を開き、その後1926年に家族とともにマニトバ州ドーフィンに移り住んで衣料品店を経営した。母アンは専業主婦だった。マックスの商売は順調で、ゴフマン家は裕福だったという。

1937年、アーヴィング・ゴフマンが15歳のとき、一家でマニトバ州の州都ウィニペグに引っ越してくると、アーヴィングは同市にあるセント・ジョンズ技術高等学校（St. John's Technical High School）に入学した（Cavan 2011：19）。この技術高等学校は進歩的な学校で、当時としては珍しくユダヤ人に対しても門戸を開いていた（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：13-14）。ただ、アーヴィング自身は「自らの起源［ユダヤ人であること―引用者］があまり好きではなく」（Winkin 2010：57）、シナゴーグにも通っていなかったようだ。技術工芸系の学校であったなかで、アーヴィングは理数系科目で並外れて優秀な生徒だった。アーヴィングの母方の従妹にあたるエスター・ベスブリスは、「セント・ジョンズ技術高等学校でアーヴィングは数学の天才として知られ、また科学においても有名だった」（Besbris 2010）と述懐している。これと同じ主旨の回想や証言は複数ある。

> 化学において彼［アーヴィング―引用者］に競争相手はいなかった。「私たちは、彼が自然科学の天才だと考えていた」とブライアン・バークは回想する。それは、彼が実家の地下室に自分専用の実験室をもっていたからである。家族の話では、少なくとも一度は彼［の実験―引用者］によって家が爆破されかかったそうで、また化学の分野では大学卒業生と同程度の知識をもっていたとされる。彼の母親の従兄弟がマニトバ大学で教授をしていた。その教授はアーヴィングの化学の実験に興味を抱き、マニトバ大学の化学科の同僚二人に来てもらい、この分野でのアーヴィングの知識を詳しく調べてもらった。すると、アーヴィングの化学の知識はマニトバ大学化学科の大学三年生に匹敵することがわかった[3]。（Winkin 2010：58）

またヴァンカンは、アーヴィングの別の面をも示唆する次のようなエピソードを紹介している。

> 彼［アーヴィング―引用者］はまた化学に夢中になっており、家に自前の実験室までこしらえたほどである。そして、1939年５月、卒業式の舞踏会の夜、彼は会場に「自家製」の、悪臭を放つ球を投げ入れたのである。（Winkin 1988：17-18）

この事件に現れている「いたずらっ子、冒険好き、大胆不敵、好奇心旺盛」（Cavan 2011）という幼い頃からの性格を基調としつつ、「化学」実験に熱中し理数系の科目で成績が飛び抜けた生徒というアーヴィングの人物像が浮かび上がる。他方で、彼は一人でいることを好み、自分の家にはほとんど友人を呼ばず、政治的議論に関与せず、ワーグナーの音楽を好んで聴いていたようだ。アーヴィング・ゴフマンに対する周囲の一般的な評価は「優秀だが変わり者」というものであった（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：14）。「付き合いが難しい」性格だったという評価もある（Winkin 2010）。

高等学校時代にみられる「理数系科目でずば抜けていたゴフマン」という学業上の人物像は、そのまま彼の大学進学に結びついている。1939年秋、アーヴィング・ゴフマン［以下、単に「ゴフマン」と表記］は地元ウィニペグにあるマニトバ大学に入学したが、その際に専攻したのは「化学」であった。

> ウィニペグの高等学校に三年通った後、ゴフマンは第二次世界大戦が勃発した最初の年（1939年）マニトバ大学の学生として籍（専攻は「化学」である）を置いた。（Burns 1992：９）

> アーヴィングのクラスメイトの多くは、セント・ジョンズ技術高等学校の第十二学年にいればマニトバ大学の第二学年に自動的になれる（しかも一年分の授業料が節約できる）のでそこに進んでいった。アーヴィングは第十一学年が終わるとセント・ジョンズ技術高等学校を去り、1939年にマニトバ大学の文理学部の第一学年に入学した。十分予想がつくことだが、彼が取ったコースは、主として自然科学、すなわち数学・物理学・化学であった。（Winkin 2010：60）

ここまでの経歴は、高等学校時代にみられたゴフマンの知的人物像の延長線上にある。しかし、その後マニトバ大学の二年間でゴフマンに学問上の転換が生じる。すなわち、マニトバ大学の第一学年と第二学年で「化学」を主専攻とするとともに「英語［英文学―引用者］」のコースを取っていたゴフマンが、第三学年になった1941年、「心理学」「社会学」「哲学」へと履修コースを変更したのである（Albas 2012）。「ゴフマンがマニトバ大学で過ごした三年の間、彼の知的な関心は徐々に社会科学のほうへ移動していった」（Smith 2006：８）との指摘があるが、後述のD・ロングの証言や次のアルバスによる情

報と突き合わせると、当時のゴフマンの関心の中心は「哲学」であったと思われる。しかも、この時期のゴフマンはA・N・ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead）の哲学に傾倒していたという。

> 第三学年になると彼［ゴフマン―引用者］は、心理学、社会学、哲学のコースを履修した。このときに彼はホワイトヘッドに強く影響を受けることになる。ホワイトヘッドは彼のお気に入りの哲学者だった。（Albas 2012）

「化学」から「哲学」へというと「理系」から「文系」へ大転換したように受け取られる可能性があるけれども、その哲学がホワイトヘッド哲学だったとすると、ゴフマンの専攻の変更は必ずしも志向性の正反対方向への転換とはいえない。ホワイトヘッド自身が「数学者」として学者生活を開始し、「物理学」を経て、後に「科学哲学」（自然哲学・形而上学）に転じていった人物である。「理数系」分野に精通していなければホワイトヘッド哲学は十分には理解できないともいえる。したがって、このときの彼の専攻変更は「実証科学」から「科学哲学」への認識の深化といえるのではないか。1944年夏にゴフマンと知り合いになったD・ロングによれば、それ以前にゴフマンはホワイトヘッドの著作を読みこなし、我がものにしていたという（後述）。それがマニトバ大学在学中のことなのか、1944年頃までのことなのかは確定できないが、マニトバ大学在学中から彼がホワイトヘッドの著作に親しんでいたことは間違いない。

上記の点に加えて、ゴフマンが「文学」好きであったことも忘れてはならない。彼はマニトバ大学時代に「化学」から「哲学」に専攻を変えたけれども、「文学」への興味を失ったわけではない。むしろ、「文学」を愛好する態度は一貫して変わらなかったようである。

> 彼は最初「化学」の学生として入学してきたが、毎年「英語［英文学―引用者］」のコースは取っていた。こうした履修コースが彼の後の著作に現れてくることに気づくだろう。彼が非常に頻繁にシェイクスピアやその他の作家を引いているのは、ご存じの通りである。（Albas 2012）

マニトバ大学時代からかどうかは不明であるが、プルースト（Marcel Proust）の『失われた時を求めて』がゴフマンの愛読書であったという（Winkin 1999：24）。博士論文のフィールド調査地のシェトランド諸島アンスト島で借りたコテージには箱で送られてきた多数の本があり、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』や一般の探偵小説も含まれていたようだ（Winkin [1992]1999：194）。彼の博士論文の文献表にはオーウェル（George Orwell）の作品[4]が二冊挙げられている（Goffman 1953：366）。最初の著書『日常生活における自己呈示』（Goffman 1956；1959）［以下、『自己呈示』］では、書き出しの直後に英国の小説家ウィリアム・サンソム（William Sansom）の作品[5]からの長い引用があるほか、オーウェル、カフカ（F. Kafka）、メルヴィル（H. Melville）など多数の小説からの引用がちりばめられている。

セント・ジョンズ技術高等学校からマニトバ大学までのゴフマンの知的活動をまとめると、「理数系科目でずば抜けていたゴフマン」と「哲学に造詣が深いゴフマン」と「文学好きのゴフマン」という三つの像が浮かび上がる。一見すると整合性がないようにみえるかもしれないが、実際は難なく両立し得る特性である。ゴフマンがもつ、こうした知的な多面性を理解しないと、一面的な「ゴフマン社会学」像が生まれてしまう危険性がある。

（2）マニトバ大学中退からカナダ国家映画委員会まで

「化学」から「哲学」に専攻を変更した翌年（1942年）、ゴフマンはマニトバ大学での学業を中断する（Raab 2008：125）。ゴフマンが「問題を抱えていた」「時々うつ状態に陥っていたようだ」（Albas　2012）との情報もあるが、一番大きい理由は「徴兵」問題であったと考えられる。第二次世界大戦（1939年９月～）に加え太平洋戦争の勃発（1941年12月）は、マニトバ大学にも戦時体制の暗い影を落としていった。カナダ国内で大学生に対する徴兵が実施されていったのである。

> 政府［カナダ政府―引用者］の関心の一つは、大学へ入学した若者は兵役を遅らせることができるという戦時政策が徴兵忌避につながっていたことである。マニトバ大学もこの懸念に応えようと1942年にその解決策として、「単に学生にとどまることで徴兵を忌避する若者の避難所に大学がなることを禁じる」と発表した。成績の芳しくない学生は、居住地の軍当局に報告されることになった。1942年の後半になると政府は、身体的に健康な男子学生はカナダ将校訓練部隊に入隊し、軍事訓練を受け、試験に合格しなければ、大学に残れないと通告した。1943年初めの大学の報告によると、89人の男子学生を含む97人の学生が成績不良のために退学しなければならなかった。（Bumsted 2001：101）

ゴフマンの退学の原因が「成績不良」であったか否かは不明だが、彼の退学が「徴兵」問題と関係していたこ

とはほぼ確かである[6]。大学を中退した後、彼はオタワにあるカナダ国家映画委員会（NFB：the National Film Board of Canada）で働き始めた。その理由について、NFBで一緒だったD・ロングは次のように述べている。

> 彼［ゴフマン―引用者］が映画委員会に入った唯一の理由は、徴兵されたくなかったということだ。委員会に入らなければ、入隊しなければならなかった。彼は自分がユダヤ人で背も低いので軍隊に入ればいじめの標的になると考えていた。彼は全く正当にもそう考えて、政府の仕事に就いたのだ。（Wrong 2011）

NFBでのゴフマンの仕事は、発送用のフィルムの箱詰めと雑誌の切り抜きであった（Smith 2006：15）。NFBでのこうした経験が後のゴフマン社会学に与えた影響については、ヴァンカンらの次のような解釈がある。

> 1940年代半ば、彼［ゴフマン―引用者］は国家映画委員会（NFB）で働いており、彼はそこで、バードウィステルの言葉を借りれば、「観念のドキュメンタリー映画制作者」であった。ここにゴフマンの二次的なハビトゥス形成にとって重要な仮説がある。NFBにいる間に彼は映画がとても好きになった。ゴフマンは、確かに、生涯を通して映像を愛した。彼は雑誌の切り抜きをして広告を保存した。彼は週に三度は映画を観た。そして彼は、700枚の写真が掲載された著書『ジェンダー広告』（1979b）を著した。より専門的・技術的には、彼はNFBで映画の用語を理解するようになったに違いない。その用語とは、ステージ、シーン、ズーム、ショット／カウンター・ショット、そしてとりわけ、フレイム――これは後に『フレイム・アナリシス』（1974年）の中心的概念の一つになった――であった。（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：14）

「彼［ゴフマン―引用者］は一時期、映画で身を立てていこうと本気で考えていたと思う」（Burns 1992：9）というバーンズ（Tom Burns）[7]の証言があるのでNFBでの経験を過小評価はできないが、過大に評価することにも注意が必要である。例えば「映像」に関していえば、「映像人類学」の先駆的作品であるG・ベイトソンとM・ミードの『バリ島人の性格――写真による分析』（1942年）があり、ゴフマンがそれを自らの著作で引用していることを考慮すると（Goffman 1963a：36）、その影響も十分に考えられる。また「フレイム」概念に関しては、ベイトソンから直接的な影響があったことがわかっているし、G・ジンメルの影響も考えられる（薄井 2013：13-16）。これらの点からすれば、一年ほどのNFBの勤務経験だけに特別の影響力を認めるのは（物語としては面白いが）解釈としては一面的で単純すぎる。

ただ、NFBでの経歴がゴフマンに再度の学問上の転換を生じさせる機縁になったことは間違いない。1944年夏、ゴフマンはNFBで一緒になったデニス・ロング（Dennis Wrong）[8]と知り合いになり、彼からトロント大学で「社会学」を勉強することを強く勧められたのである。当時ロングはトロント大学に籍を置いており[9]、一方、ゴフマンは中断した大学の課程を修了し学士号を取得しようと考えていたところだった。次の引用は、ロングの回想である。

> 私［ロング―引用者］がゴフマンと映画委員会で会ったとき、彼は私に「本当のところマニトバ大学に戻って、専攻していた哲学を勉強したいとは思わない」と語った。彼が「哲学は専門化し過ぎていて私の趣味に合わない」と言ったので、私は「社会学をやってみたら」と言った。このようにして、私は彼に社会学の勉強を強く勧めたのである。（Wrong 2011）［傍点は引用者］

この証言を信じれば、ゴフマンがマニトバ大学を中退する直前の専攻は「哲学」であったことになる（Wrong 1994：310）。したがって、ゴフマンがマニトバ大学在学中に専攻を「化学」から「社会学」に変えた（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：14）との記述は正確でなく、前後の関係を詳しく見てみると、彼は専攻を「化学」から「哲学」へ、そして「社会学」[10]へと変えていったことになる。なぜこの点にこだわるかというと、『フレイム・アナリシス』（Goffman 1974）以降の「後期ゴフマン」において哲学的・認識論的志向性が強くなるという“通説”とは異なり、シカゴ大学以前、さらにトロント大学以前の「最初期ゴフマン」の段階から彼が哲学的志向性をもっていた可能性が出てくるからである。そして、もしそれが事実であれば、従来のゴフマン像に重大な変更を迫ることになるだろう。哲学に詳しかったロング自身が、感嘆気味に、当時（1944年頃）のゴフマンがもっていた哲学の素養のレベルについて語っている。

> アーヴィングは以前に哲学を勉強していて、実際、ホワイトヘッドの『過程と実在』は完全に読み込んでいた。彼はホワイトヘッド流の言い回しを用いて、現実は「自然に区切られた線に沿って」――明らかにこれは後年の著作で彼が従ったルールである――知覚されるべきであると主張していた。（Wrong 1990：9）

このように「ホワイトヘッド哲学を自家薬籠中のもの

としていたゴフマン」という知的水準に当時の彼が達していたと想定すれば、ヴァンカンが紹介している次のようなエピソードも、自然に受け入れられる。ハーバード大学のT・パーソンズ（Talcott Parsons）がトロント大学で出張講義をしたとき（1944年か1945年）のことである。

仲間が記憶していたもう一つの面は、ゴフマンがその完全な意味で並外れた読書家だったということである。ある世代の思想的指導者になろうとしていた米国の社会学者タルコット・パーソンズが学部で講義をしに来ていたその日、パーソンズは教室の後部座席に座っている学生［ゴフマン―引用者］から弾幕射撃を受けるとは全然予期していなかった。この学生はパーソンズの著作を全て読んでいるようであったが、ホワイトヘッドの認識論的著作に依拠しながらパーソンズの著作を批判したのであった。」（Winkin 1988：25）

当事者であったD・ロングが描写する出張講義の様子は微妙に異なっているけれども、ゴフマンの知的レベルに関しては、ほぼ同じ内容の情報を伝えている。

ハートとクラークは私たちにタルコット・パーソンズの『社会的行為の構造』を紹介した。そして、パーソンズ自身も何度か一般向けの講義をするためにトロント大学を訪れた。私が覚えているのは、ゴフマンと私がパーソンズにいくつか質問をして、そこに居合わせていた学生全員が彼の著書をすでに読んでいて完全に理解しているという印象をパーソンズに与えたため、クラスメイトを憤慨させたことである。その結果、パーソンズの口から出てきた言葉は、聴衆の大多数には難しすぎて全く理解できない内容であった。（Wrong 1999：10-11）

このときゴフマンがパーソンズに質問したのはホワイトヘッドの「具体者置き違えの誤謬」[11]に関するものだったと筆者は推測する。いずれにせよ、ロングの証言にあるように、当時「ホワイトヘッドは彼［ゴフマン―引用者］に影響を与えた主要な人物であった」（Wrong 2011）ことは間違いないようだ。その一方で「哲学は特殊分化しすぎていて私の好みに合わない」（ibid.）とも述べている。当時のゴフマンの心境は、ホワイトヘッド哲学はお気に入りだが、一般的な哲学は勉強したくないといったものだったのだろうか。

しかし、ある種の哲学および科学哲学への志向性はこの時期以降ゴフマンの中に一貫して存在したことが確認できる。シカゴ大学に提出した彼の修士論文の目的の一つが「マーレーのTATを使用することでデータを収集し、証拠になるものを科学的コントロール下に置くことが可能になるかをテストすること」（Murray 1998：146）とされていて、実際「三部構成の第一部と第二部、そして分量にして全体の約半分が自らの方法論の検討に充てられている」（薄井 2011：71）。この点でゴフマンの修士論文は実証科学より高次の視点に立っている。また、修士論文の文献表にカッシーラー（Ernst Cassirer）の『実体概念と関数概念』やバート（E. A. Burtt）の『近代物理科学の形而上学的基礎』など科学哲学の書物を挙げている。修士課程では、オーストリアから亡命してきた現象学者イッヒハイザー（Gustav Ichheiser）やシステム論的な思考法をもった特異な生化学者ヘンダーソン（L. J. Henderson）に関心をもち、博士論文（Goffman 1953）に引用している。博士論文では分析哲学者G･ライル（Gilbert Ryle）の『心の概念』にも言及している。「ドラマトゥルギー」的アプローチで有名な『自己呈示』（Goffman 1959）においても、多数の哲学者からの引用がみられる。その扉に米国の詩人・哲学者サンタヤーナ（George Sanatayana）の難解な文章を掲げ、本文中でも引用しているほか、サルトル（Jean-Paul Sartre）の『存在と無』やベルクソン（Henri Bergson）の『笑い』、W・ジェイムズ（William James）からの引用[12]がある。『公共の場での行動』（Goffman 1963a）では、オルテガ・イ・ガゼー（Ortega y Gasset）やライルの著書への言及がある、等々。

加えて、彼のシカゴ大学修士課程で起こった以下の事件は、同時期に大学院生だったハワード・ベッカー（Howard S. Becker）が「文献」の重要性を示すエピソードとして挙げているものだが、ゴフマンの「自然科学」および「科学哲学」における知識がシカゴ大学入学以前からかなり高い水準に達していたことを物語る出来事として読むことも可能である。

学者は大学院で文献の怖さを知るようになる。このことで思い出すのは、シカゴ大学の傑出した人物の一人であったルイス・ワース教授によって、当時、大学院の同僚であったアーヴィング・ゴフマンが文献をめぐって窮地に追い込まれた一件である。それは、私たち皆が恐れていたことであった。ワースが操作主義に関する有力な考え方に十分な注意を払っていないと思ったゴフマンは、その主題に関するパーシー・ブリッジマンの著作から引用して、教室内でワースに挑んだのである。すると、ワースは笑みを浮かべながらサディスティックな調子でこう質問した。「それは第何版だね、ミスター・ゴフマン」。たぶん版による違いが重要だったのだろうが、私たちはそんなことなど考えもしなかった。（Becker 2007：136）

パーシー・ブリッジマン（Percy W. Bridgman）は、米国の物理学者で、「高圧（high pressure）」研究で1946年にノーベル物理学賞を受賞した人物である。この「ブリッジマンの著作」とは、『現代物理学の論理』だと思われる。自然科学における「操作主義」を主題としたこの著作を（「版」の問題は別にして）ゴフマンが修士課程の段階で読みこなしていたことが事実だとすれば、シカゴ大学入学以前から相当の「物理学」の知識[13]と「科学哲学」の素養があったと想定したほうが、シカゴ大学入学後に付け焼き刃でそれらを身につけたと想定するよりも、推論として自然である。そして、前者の想定は、トロント大学以前に形成されたゴフマンの知的な人物像、すわなち「理数系科目でずば抜けていたゴフマン」と「哲学に造詣が深いゴフマン」に符合する。

（3）トロント大学時代

話を実生活の経歴に戻そう。NFBで知り合ったD・ロングの勧めと尽力によってゴフマンは、1944年秋からトロント大学のユニバーシティ・カレッジの政治経済学部で学ぶことになる。「社会学科」は当時、政治経済学部に置かれていた。社会学科でゴフマンは「人類学」と「社会学」を中心に勉強していった。彼は最終的にトロント大学から学士号を得るが、当初は「学位取得を目的にしない学生（an occasional student）」として受け入れられた（Wrong 2011）。トロント大学には他にもNFB出身者数人が入ってきていて、（D･ロングとE･ボット以外は）彼らNFB出身者がトロント大学でのゴフマンの友人だったようだ（Bott-Spillius 2012）。

トロント大学でゴフマンは、主として二人の教師から強い知的刺激を受けた。その二人とは、人類学者C･W･M･ハート（Charles W. M. Hart）と人類学者R･バードウィステル（Ray Birdwhistell）である。

> 当時ハートは、他の著作に加えて、エミル・デュルケムの『自殺論』とタルコット・パーソンズの『社会的行為の構造』をゴフマンに紹介した。もう１人の彼の先生はR・バードウィステルであった。彼もまた文化人類学と社会学の幅広い読書をゴフマンに勧めた。（Treviño 2003： 3 ）

ハートの名は、ゴフマンの最初の著書『自己呈示』（Goffman 1956；1959）の「謝辞」に、シカゴ大学での師ウォーナー（W. Lloyd Warner）やヒューズ（Everett C. Hughes）と並んで挙げられている。ハートは1920年代オーストラリアのシドニーで社会人類学者ラドクリフ=ブラウン（Alfred R. Radcliffe-Brown）の指導を受けた直弟子で、「徹底した機能主義者」（Wrong 1990：10）であった。ゴフマンが在籍していたとき、トロント大学のハートの講義では、まだ英訳のないデュルケムの『自殺論』（*Le Suicide*）の詳細な読解が行われた。この講義には友人のD・ロングや恋人のE・ボット（Elizabeth Bott）[14]も出席していた（Winkin 1999：23）。通年で行われたこの授業（Wrong 1990：10）は、ゴフマンがデュルケムの著作に本格的に触れた最初の経験となった（Smith 2006：15）。また彼は、自然な流れでハートを介してラドクリフ=ブラウンの著作や論文を読んだほか、マリノフスキーやウォーナーの著作も読んでいった（Bott-Spillius 2012）。ゴフマンがデュルケムやラドクリフ=ブラウンから受け継いだ視角や概念は少なくないが、その中で最も重要なものの一つとして「社会」を“一種独特の存在体”とみる視角がある。次の言明は、ゴフマン晩年のものである。

> 何かを研究する場合、最初に、その事柄をそれ自身の価値によって存立し、それ固有のレベルで存立している一つのシステム（a system *in its own right*, at its own level）として扱うことを目標にするというのが、私［ゴフマン―引用者］の信念である。この先入観（bias）は、（……）デュルケムおよびラドクリフ=ブラウンの機能主義という起源から発している。博士論文で対面的相互行為をそれ自身の価値によって存立する一つの領域として扱うことを試み、「相互行為」という用語を偉大な社会心理学者とその追随者が見捨てようと準備していた場所から救い出すのを試みるよう私を導いたのも、この先入観である。（Goffman［1981］2000：81-82）［傍点・イタリック体は引用者］

この視角は、ハートの授業で読んだ『自殺論』においても「新しい、一種独特の事実（une fait nouveau et *sui generis*）」（Durkheim 1897： 8 ）といった語句で表されているが、より明確に示されているのは『社会学的方法の基準』である。そこには、上で引用したゴフマンの言葉と“瓜二つ”の表現も登場する。

> それら［行動や思考の社会的様式―引用者］は、一つの体、すなわち触知できる形態を獲得し、それを生み出す個人的諸事実とは明確に区別される、それ自身の価値によって存立する一つの現実（a reality *in their own right*）を構成する。（Durkheim［1895］1938：7 ）［傍点・イタリック体は引用者］

デュルケムの『社会学的方法の基準（*Les Règles de la méthode sociologique*）』の英訳は1938年に出版されているので、トロント大学時代のゴフマンはそれを英語で読

める状況にあったし、その可能性は十分にある。

また、機能主義の社会人類学理論であるラドクリフ=ブラウンの理論に対するゴフマンの選好と、後に構造－機能主義と社会システム論を展開するパーソンズの理論へのゴフマンの親和性とは、ゴフマンの知的な人物像の中で無理なく結びつく。

> ゴフマンはパーソンズを一度も攻撃したことがなく、実際、彼［パーソンズ―引用者］の機能主義的な先入観（bias）を共有しているが、パーソンズの名を挙げたことは一度もない[15]。」（Collins 1986：108）

事実としてゴフマンは、ハートらから紹介されたパーソンズの『社会的行為の構造』（Parsons［1937］1949）をただ読んだというだけでなく、著者パーソンズの出張講義で直接本人に批判的な質問をするほどまで読み込んでいる（前述）。それは、恋人のE・ボットにも同書を読むよう勧めていることからも傍証される（Bott-Spillius 2012）。「機能主義」という点では、ラドクリフ=ブラウンとパーソンズとゴフマンの間に親近性[16]が存在しているのである。この点で、十年後に提出したゴフマンの博士論文に対してヒューズが示したとされる次の不満は、図らずも、ゴフマンとパーソンズの理論的な親和関係を示す証拠となっている。そして、そうした関係はトロント大学時代にすでに形成されていたと思われる。

> ゴフマンが博士論文の第一章で「相互行為秩序」とパーソンズの「社会秩序」をパラレルに扱っていることにもヒューズは少しばかり苛立った。（Winkin 1999：26-27）

もう一人の教師R・バードウィステルは、ゴフマンがトロント大学で学び始めたとき20歳代半ばの新任講師で、ウォーナーとエガン（Fred Eggan）の下でシカゴ大学から人類学の博士号を取得する準備をしていた（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：14）。バードウィステルは学生にG・ベイトソンの『ナヴェン』[17]をはじめ人類学・社会学の著作の読書を勧めた（Winkin 1988：22）ほか、授業では、「動作学（kinesics）」の創始者らしく、次のような課題を学生に与えたという。その課題とは、例えば飲食店にいる他の客を対象に選び、服装や酒の飲み方から靴底の状態までを学生に観察させて、その客が社会階層において「上層上位／上層下位／中層上位／中層下位／下層上位／下層下位」のどこに属しているか言い当てさせるというものであった（Winkin 1999：23-24）。こうした課題を通してゴフマンは、身なり・しぐさの細部にその人物の出身階層や出身地が表現されるという視点を身につけ、この面での識別力を磨いていったと思われる。後の著作でゴフマンが彼に言及することはそれほど多くないが、例えば『公共の場での行動』（Goffman 1963a）では四か所でバードウィステルに言及している。その一つを挙げておこう。

> ちょっとした身体的動作が、一定の状況において直に居合わせる人たちの関係に対してもつ意味に関しては、「動作学」に関するバードウィステルの業績に触発されて近年研究が行われてきている。（Goffman 1963a：228）

こうした「動作学」的な課題以外にも、バードウィステルは、ユニークな課題を学生に与えていた。

> バードウィステルのアプローチは前代未聞のやり方であった。彼が私たちに与えた論文の論題は普通ではなかった。私［E･ボット―引用者］の論題は、『ニューヨーカー』の風刺漫画のユーモアを社会学的に分析することだった。残念ながら、アーヴィングに与えられた論題が何だったかは覚えていない。アーヴィングは私に、論文で何を書けばいいかを教えてくれた。それを書いた私はA+評価で、アーヴィングはD評価だった。彼［ゴフマン―引用者］は私に言った、「君は試験に合格した。私は天才なのに誤解されている」と。（Bott-Spillius 2012）

バードウィステルとゴフマンの個人的な関係は、トロント大学時代以降も続いたとみてよい。例えば、ジョサイア・メイシー財団の後援で1956年にプリンストン大学で開催された「集団過程」に関する会議にゴフマンが招待されたのは、バードウィステルの紹介による（Winkin 1988：85）。また、バードウィステルの著書『動作学と文脈』（Birdwhistell 1970）の「序論」には、ゴフマンの学問的貢献に対する賛辞が記されている。

> 私はアーヴィング・ゴフマンから持続的な影響を受けている。相互行為的な活動の社会学的な分析へのゴフマンの貢献は、『自己呈示』から『アサイラム』を経て『出会い』に到るまで、人々が意味をもって規則正しく相互行為する文脈や手段の構造を解明してきたことである。（Birdwhistell 1970：xii-xiii）。

そして、トロント大学時代、教師たちや彼らを介した知的な刺激以外で、ゴフマンが強く影響を受けた学説としてフロイトの精神分析が指摘されている。

トロント大学時代、彼［ゴフマン―引用者］はフロイトに大変関心をもっていた。1930年代から1940年代は、北米においてフロイトが最も流行した時期であった。ゴフマンは決してこれらのテーマを社会学において追究しなかったけれど、それをしていたら何らかの影響を残したかもしれない。エヴァレット・ヒューズが後に私に語ったところによると、ゴフマンが初めてシカゴ大学に来たときの印象は、ゴフマンが若い知ったかぶりで、誰の動機も見抜けるという高慢な態度をもったフロイディアンであった、というものであった。」（Collins 1986：110）［傍点は引用者］

ほぼ同時期にゴフマンがフロイトの著作を読み込んでいたことは、D・ロングの証言からも確認できる。

私［ロング―引用者］が原典に当たらないで教科書や通俗書を読んでいたために、彼［ゴフマン―引用者］に非難されたことを覚えている。私たちが皆の肌に合う新フロイト派の方を好んでいたのに対して、彼は幼児体験の優越性と身体を強調したフロイトの説を擁護した。後年ゴフマンが精神分析に反感を抱いたことはよく知られているが、精神分析の創始者の洞察よりもそれを修正したエーリッヒ・フロム、カレン・ホーナイ、ゴードン・オルポートの方に真理と知的な深さがあるということに関して、彼は私の中に初めて小さな疑問の痛みを生じさせた。（Wrong 1990： 9 ）

このほか、当時ゴフマンが英訳のフロイト選集を読んでいたというボットの証言（Bott-Spillius 2012）や「シカゴ大学時代、ゴフマンはフロイディアンと見なされていた」（Manning 1999：109）という指摘もあり、「フロイトの学説に精通していたゴフマン」という人物像は確かに存在したといえる。

にもかかわらず、ゴフマンは論文や著作においてフロイトにあまり言及していない。修士論文で『フロイト選集（*Collected Papers*）』の第一巻と第三巻を参考文献として挙げているが、その後は『自己呈示』の脚注で二か所（Goffman 1959：53n, 193n）、『出会い』で三か所（Goffman 1961：24, 45, 60）、『公共の場での行動』で「フロイディアン――」の形で二か所（Goffman 1963a：228, 238）などで、フロイトへの言及数は少ない。影響を受けた大きさと対照的な言及している箇所の少なさ。この落差は一見奇妙だけれども、ホワイトヘッドの哲学に傾倒していたはずのゴフマンがその後一度もホワイトヘッドの名を挙げていないことを考え併せれば、「深く影響を受けた思想・理論ほど、明言することがなかったり、言及する頻度が少ない」という傾向[18]がゴフマンにあるのではないかとの推測すら成り立つ。

この点に関して確定的な判断は下せないが、ゴフマンがフロイトの学説から引き継いだ視点として、以下の二つを挙げても異論は出ないだろう。その一つは、微細な現象に「意味」を読み取る視点である。ただし、この視点はバードウィステルから学んだものでもある。

ゴフマンにおいてもフロイトにおいても、身振り、眼差し、話された言葉が全て意味――社会的意味か心理的意味――をもつ。全てはつねに表徴（ゴフマンにおいて）であるか、症状（フロイトにおいて）である。（Winkin 1988：68）

もう一つは、異常なものの考察を通して正常なものの構造や機能を解明しようとする視点である。この視点は、デュルケムから学んだものでもある。

デュルケムとフロイトと同じく、ゴフマンは正常な社会的行為については、その異常な形態を注意深く考察することによって、よりよく知ることができると信じていた。（Smith 2006：10）

フロイトと同じく、ゴフマンは奇異で例外的なものが普通で自明なものの構造をどのようにして浮かび上がらせるかをよく理解していた。（Smith 2006：69）

『公共の場での行動』（Goffman 1963a）の基本的な視点がそうであったし、『スティグマ』（Goffman 1963b）の基本的な視点もまた同様であったといえる。前者から、この視点に該当する記述を挙げておこう。

一般に、個人がある状況に参加して十分に社会的権能を果たそうと思う場合、発生する可能性のある刺激に対応できるという証拠として、一定レベルの抜け目なさが要求され、またその個人が参加している集まりに対して機敏に対応している証拠として、個人の外見の整然さが要求される。もちろん、分析上の問題は、それらが不十分な形で現れる種々の形態を分析的に分離する作業に進んでいかなければならないということである。（Goffman 1963a：30）［傍点は引用者］

以上から総合的に判断して、ゴフマンの理論的バックボーンは遅くともトロント大学時代には形成されていたと考えてよいのではないか。デュルケム、パーソンズ、ラドクリフ=ブラウン、バードウィステル、フロイトの各理論をゴフマンは自分流に“消化”していた。そして、それ以前にゴフマンはホワイトヘッド哲学を我がものとしていた。トロント大学に入る直前のゴフマンの知的レ

ベルについて、D・ロングはこう述べている。

ゴフマンは直観的で純真な人物で、社会に対する並外れた観察力をもった小説家であるという観念が流布しているが、それは全く誤りである。私が彼に会ったとき、すでに彼は鋭敏でスケールの大きい理論的な知性（an acute and far-ranging theoretical mind）をもっていた。彼は私たちの誰より知的にずっと進んでいた。（Wrong 1990： 9 ）［傍線は引用者］

このように見てくると、「トロント大学で彼［ゴフマン―引用者］が学んだことがゴフマンの知性形成に与えた影響は、多くの研究者が認めているよりもずっと大きかった」（Garner & Hancock 2014：341）という指摘は適切であり、また重要な視点を提供するものである。とかく“社会学の名門校”シカゴ大学での影響を過大視する研究傾向に対して、この視点はバランスを取る効果をもつからである。（もちろん、トロント大学での影響も過大視しないという条件付きであるけれども。）冒頭に挙げたヴァンカンは、近著で、以前の自分の見方を少し修正するかのような解釈を示している。

この時点［トロント大学修了―引用者］までに、アーヴィング・ゴフマンは、彼の著書から私たちが彼らしさを感得するアーヴィング・ゴフマンらしくなり始めている。彼は一定の知的訓練を受け、何人かのお気に入りの理論家（フロイト、デュルケム、パーソンズ）も選択している。後に顕現する特性――政治的な議論を嫌う傾向、社会的な標識に対する強い興味、集団に半分だけ入り込み半分だけ距離を取る能力――は、すでに身についている。彼の知的訓練における次の段階［シカゴ大学時代―引用者］に入ると、こうした「習性となる諸力」が強化されていったのである。（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：15）

筆者としては、この解釈でもまだ不十分だと思うが、ゴフマンの知的形成過程におけるシカゴ大学以前の時期の重要性を傍証するものとして評価したい。知的にかなり早熟だったロングやボットが舌を巻くほどゴフマンは「知的にずっと進んでいた」。そうしたゴフマンがシカゴ大学の修士課程に入学したとき、彼はすでに23歳になっていたのである。知的にきわめて早熟で、並外れた読書家で、種々の知的遍歴を経てきた当時のゴフマンの中に、後に「ゴフマン社会学らしさ」として顕現する理論のバックボーンが形成されていなかったとすれば、むしろそのほうが不自然であろう。そうした観点から見てみると、シカゴ大学でゴフマンが師事したE・C・ヒューズが後に手紙に書いた次の言葉は、ヒューズの記念論文集への寄稿者に対する社交辞令という面はあるけれども、シカゴ大学入学時におけるゴフマンの知的成熟度の高さを裏付ける証言にもなると思う。

確かに私［ヒューズ―引用者］は寄稿してくれた人たちの誰の中にも新しいものを創り出しはしなかった。例えば君［ゴフマン―引用者］は周辺的なもの[19]に対する全方位的な探索能力をすでに備えてトロントからやってきたし、以来、君はそれらに自ら気づいてきただけでなく、それらに対する関心を他の人たちに喚起してもきた。［傍点は引用者］

3．結びに代えて

以上、主としてセント・ジョンズ技術高等学校入学からトロント大学修了までの時期において、アーヴィング・ゴフマンがどのように知的に成長し、いかなる知的遍歴を経てきたかを概観してきた。

セント・ジョンズ技術高等学校では「化学」「数学」などの理数系科目においてずば抜けていたゴフマンがいた。引き続きマニトバ大学の第二学年までは「化学」を専攻していたゴフマンがいた。この「理数系科目を大得意とするゴフマン」という知的人物像は、『自己呈示』をはじめとする後の著書から読者が抱くゴフマンの知的人物像と、どのような形で結びつくのか。あるいは、両者は別もので、全く結びつかないのか。

マニトバ大学の第三学年になると、ゴフマンは一転して「哲学」に専攻を変える。それ以降は、「哲学に造詣の深いゴフマン」、特に「ホワイトヘッド哲学を我がものとしていたゴフマン」といった知的人物像が前面に出てくる。ホワイトヘッド哲学とゴフマン社会学。この二つはどう結びつくのか。また、ホワイトヘッド哲学は、ゴフマンの特異な社会学方法論[20]と如何なる関連性があるのか。あるいは、それらは全然無関係なのか。

説明を要する、ゴフマンのこうした知的経歴と彼の社会学理論の形成過程との関連性に関しては、これまで全く研究されてこなかった。従来から唱えられてきた「デュルケミアンとしてのゴフマン」や筆者が提出した「隠れジンメリアンとしてのゴフマン」（薄井 2013）といったゴフマン像の背後に控え、かつその他の多彩なゴフマン像をも包摂するような“ゴフマン固有の世界像（社会学者ゴフマンに見えていた世界）”を解明するヒントが、この未解明の領域に隠されていると筆者は考えている。そして、その鍵を握るのはホワイトヘッド哲学ではないかとの狙いもつけている。しかし、如何せん、この領域にはデータになるゴフマンの学業上・学問上の資料

が欠落していることも事実である。こうした研究上きわめて不利な状況のなかで“ゴフマン固有の世界像”に迫るには、当該時期におけるゴフマンの知的生活誌をより確定的で詳細なものにしていく作業を進めると同時に、その経歴上の事実から導き出されるゴフマン社会学の形成過程に関する仮説を立てていって、修士論文や最初期の学術論文から、博士論文、その後の著作群までを、新たな視点で読み直していくことが必要となる。「ゴフマン社会学の謎（the enigma of Goffmanian sociology）」を読み解く作業は、新しい局面に、そして一段階深いレベルに移行しつつある。

［注］

（1）ヴァンカンは後の論文（Winkin 2010）で、セント・ジョンズ技術高等学校時代のゴフマンについて詳しく描写している。本資料では、そこからいくつかの箇所を引用している。しかし、同論文および他の論文でもヴァンカンは「マニトバ大学時代のゴフマン」についてはほとんど触れてはいない。また、ヴァンカンは上記の論文で「技術高等学校時代のゴフマン」を詳述しているが、それが後のゴフマン社会学といかなる関係にあるのかは論じていない。

（2）アーヴィング・ゴフマンの姉フランセスは、1930年代にカナダでラジオ番組の声優になり、その後、ニューヨークに渡って演技を学んだ。1946年に結婚してフランセス・ベイ（Frances Bay）となり、一般にはこの名のほうが知られている。59歳という年齢で女優になり、1978年のコメディー映画『ファール・プレイ』で映画デビューした。その後も「性格俳優」としてテレビや映画で活躍したが、2011年肺炎の合併症で92歳で亡くなった。

（3）これが事実なら、ゴフマンが進学したマニトバ大学文理学部の第一学年・第二学年での「化学」の授業や実験は退屈であったに違いない。彼にとっては、すでに知っていることばかりであっただろうから。このことが、ゴフマンがマニトバ大学の第三学年で「化学」専攻をやめた理由の一つになったのだろうか。その結果、ゴフマンは自分の知的欲求にふさわしい学問を「化学」以外に追い求めていったのだろうか。

（4）ゴフマンはオーウェルから「人でない存在（non-person）」という用語を継承し、彼独自の形で発展させた。この論点に関しては、（Travers 1999）を参照のこと。ゴフマンの著作において、G・オーウェルの作品からの引用は多い。

（5）ゴフマンは、ウィリアム・サンソムがお気に入りだったのか、『自己呈示』のほか『出会い』や『公共の場での行動』でも引用している。

（6）ヴァンカンは、ゴフマンは成績不良でなかったと考えてゴフマンがNFBに入った理由は徴兵忌避ではないとしているが（Winkin 1988：18）、その根拠を示していない。筆者は、D・ロングの直接的な証言のほうが信憑性があると考えている。

（7）トム・バーンズ（Tom Burns）は、ゴフマンが英国のエディンバラ大学社会人類学科の助手の職に就いていたときの同僚で、ゴフマンの赴任（1949年10月）と同時期に研究講師の職に就いた。ラドクリフ=ブラウンの「冗談関係」に刺激を受けた研究をしていた。バーンズの名は、『自己呈示』の脚注に挙げられている（Goffman 1959： 3 n）。後に、エディンバラ大学の社会学の教授となる。バーンズには『アーヴィング・ゴフマン』（Burns 1992）の著書がある。

（8）デニス・ロング（Dennis Wrong）は、カナダ生まれの米国の社会学者で、後にニューヨーク大学の名誉教授になった人物である。高名な学者の家系で、祖父はカナダの歴史学者でトロント大学の教授・学科長、およびカナダ王立協会のフェローを務め、父はトロント大学の歴史学教授に就いた後、カナダの米国大使となった。D・ロングの年齢はE・ゴフマンより一歳若かった。トロント大学卒業後ロングは、R・K・マートンのいたコロンビア大学の大学院に進学した。

（9）NFBでゴフマンに出会ったときのロングの地位に関して、「トロント大学を最近卒業したばかりの社会学の学生」（Smith 2008：15）だったという記述がある。しかし、その後ロングがトロント大学でゴフマンと一緒に学んでいる事実があるので、卒業生という記述は誤りだと判断する。

（10）一般にゴフマンは専攻を「社会学」に変えたとされているが、その専攻は「人類学」だったと言ったほうが正確かもしれない。少なくともトロント大学時代でみるかぎり、主として彼が影響を受けたのは「人類学」者であった。影響を受けたデュルケムの理論もおもにラドクリフ=ブラウンを介した理解であった。また、従来考えられていた以上に理論的な関係が深いと考えられるG・ベイトソンは人類学者ではあっても、社会学者とは言いにくいだろう。加えて、当時「文化人類学」「社会人類学」と「社会学」は現在ほど峻別されていなかったことも考慮すべきである。

（11）ホワイトヘッドが指摘する「具体者置き違えの誤

謬（fallacy of misplaced concreteness）」とは、（具体的な事象から）抽象された観念・概念を具体的な事象と取り違える思考法を指す。ホワイトヘッドは『科学と近代世界』で初めてこの誤謬について述べた。『社会的行為の構造』においてパーソンズは、「緒言」を含め二か所でこの誤謬に言及している。

（12）ホワイトヘッドはベルクソンの影響を受けているし、ベルクソン哲学とウィリアム・ジェームズの「根本的経験論」には類縁性がある。このように、ここで挙げられている哲学者たちは互いに無関係ではなく、彼らの間には、ある種の類似性や関連性が存在しているように思われる。

（13）ヴァンカンの指摘（前述）によれば、ゴフマンがマニトバ大学の第一・第二学年で取ったコースは「数学・物理学・化学」（Winkin 2010：60）［傍点は引用者］であったという。これが事実だとすれば、ゴフマンの「物理学」の知識はマニトバ大学在学中にそれなりの水準に達していたと考えてよいだろう。

（14）エリザベス・ボットは、ゴフマンがトロント大学で知り合った二歳年下の女子学生で、在学中に彼と恋人関係になった。E・ボットの両親はともに心理学者で、父エドワードはトロント大学の心理学科の創設者、母ヘレンは子どもの発達心理の研究者でトロント大学教授であった。その影響か、E・ボットはトロント大学では「心理学」を専攻した。卒業後「社会人類学」を専攻しようと思いゴフマンとともにシカゴ大学に入学したが、米国の文化人類学で当時支配的だった「文化とパーソナリティ」研究に満足できず、修士号取得後、ロンドン・スクール・オヴ・エコノミクスで博士号を取得すべく渡英する。ゴフマンとは1946年に恋人関係ではなくなったようだが（Winkin & Leeds-Hurwitz 2013：16）、友人としての交流はその後も続いた。ゴフマンが博士論文のフィールド調査を行っていた時期（1949年12月～1951年５月）に彼女と何度か会っていたことをボット本人が証言している（Bott-Spillius 2012）。ボットは渡英後メラニー・クラインの著作に触れて開眼し、クライン派の精神分析家として国際的に活躍していく。人類学者ジェイムズ・スピリウス（James Spillius）と結婚してエリザベス・ボット=スピリウスの名になったが、一般にはエリザベス・スピリウス（Elizabeth Spillius）の名で知られる。ゴフマンの『自己呈示』の「謝辞」に「研究の初期段階で助けてくれた」人物の一人としてその名が挙げられている。

（15）この指摘は正しくない。ゴフマンは博士論文の文献表（Goffman 1953：366-367）にT・パーソンズの『社会的行為の構造』と『社会システム論』を挙げているほか、『出会い』（Goffman 1961）でも『社会システム論』から引用している。

（16）ラドクリフ=ブラウンがホワイトヘッド哲学の影響を受けたとする説が定説になっている（Langham 1981：244）。また、ホワイトヘッド哲学がT・パーソンズの社会システム論のベースになっているという指摘がある（Fararo 2001）。ホワイトヘッド哲学に影響を受けたその他の人物として、人類学者ベイトソン（G. Bateson）、社会学者ホーマンズ（G. C. Homans）、社会学者ホワイト（W. F. Whyte）、経営学者バーナード（C. I. Barnard）、哲学者バーク（K. Burke）が有名だが、彼ら全員がゴフマン社会学と関係の深い人物である。

（17）ベイトソンの『ナヴェン』（1935年）は、ニューギニアのイアトムル族の文化をナヴェンの儀式を通して構造的・情動的・社会学的な視点から分析した著作である。文化の根底にある思考原理を解明する「エイドス」分析や文化の情緒的側面に焦点を当てる「エトス」分析を試みたり、システム論やサイバネティクス的な思考法を背景にして「分裂生成（schismogenesis）」という考え方を提出するなど、理論的な意欲作であった。ゴフマンは「『ナヴェン』は本当にすばらしい本です」（Winkin 1988：233）と後年述べているが、この著作を読んだのはバードウィステルに勧められたときだと考えられる。そうすると、ゴフマンがベイトソンの理論を知ったのはトロント大学時代（1944－45年）にまで遡ることになる。また、『ナヴェン』だけでなく『バリ島人の性格――写真による分析』（1942年）からの種々の知的な刺激を受けている点からすれば、ベイトソンとの理論的な関係を「フレイム」概念に限定するのは一面的な理解である。このようなゴフマンの読書傾向から、トロント大学時代にすでに彼が相当に「理論」志向であったこともわかる。

（18）筆者は、以前の論考で、「状況証拠からいえば、ジンメル社会学の影響をゴフマンが多分に受けているはずなのに、ゴフマンは『ジンメル社会学の影響を受けている』と述べていない」点を捉えて、ゴフマンが「隠れジンメリアン」だったのではないかという仮説を立て、その一定の論証を試みた（薄井 2013）。フロイトに関しても、そしてホワイトヘッドに関しても、同様の視点で理解するこ

とができるかもしれない。しかし現段階では、まだ「仮説」の域を出ない。

（19）1969年２月12日付のゴフマン宛のヒューズの手紙（http://cdclv.unlv.edu/ega/documents/eg_hughes.pdf）であるが、残されている手紙では「pe.....」の箇所が何かに隠れていて判読不能である。原文は以下の通り。“I certainly did not create anything in any of those people. You, for example, came down from Toronto already with your feelers out in all directions to pe..... ..... which you have since not only perceived but called to attention of others.”「pe.....」の箇所を「peripheral .....」と推測して訳している。

（20）ここでいう「ゴフマンの特異な社会学方法論」とは、『自己呈示』などで適用されたK・バークおよびE・C・ヒューズの「異事象併置による透視図法」（薄井 2016： 5 - 6 ）のことではない。『自己呈示』で冒頭で採用した「ドラマトゥルギー」の視角をその巻末で放擲するというやり方に典型的にみられるように、著作ごとに異なるといってよいほど変化する分析用語の使い方である。継続的に使われている用語もいくつかあるが、キーワードであっても一度使われただけで二度と使われない用語が多々ある。

［文献］

Albas, D., 2012, “At the Convocation Goffman Said,“One Is Born Near a Granary and Spends the Rest of His Life Suppressing It”, ”（URL：http://digitalscholarship. nlv. edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1001&context=goffman_ archives ）［2017年９月22日閲覧］.

Becker, H. S., 2007, *Writing for Social Scientists：How to Start and Finish Your Thesis, Book, or Article*, The University of Chicago Press.

Besbris, E., 2010, “When Erving Was an Infant My Mother Nursed Us Both So We Were Bosom Buddies, ”（URL：http://cdclv.unlv.edu/archives/interactionism/goffman/ besbris_09.html）［2017年９月22日閲覧］.

Birdwhistell, R., 1970, *Kinestics and Contex：Essays on Body Motion Communication*, The University of Pennsylvania Press.

Bott-Spillius, E., 2012, “Erving Goffman in Toronto, Chicago and London, ”（URL：http://cdclv.unlv.edu/archives/interactionism/goffman/bott-spillius_10.html）［2017年９月22日閲覧］.

Bumsted, J. M., 2001, *The Manitoba University：An Illustrated History*, The University of Manitoba Press.

Burns, T., 1992, *Erving Goffman*, Routeledge.

Cavan, S., 2011, “When Goffman was a boy, ”（URL：http://cdclv.unlv.edu/ega/articles/cavan_eg_boyhood.pdf）［2017年９月22日閲覧］.

Collins, R., 1986, “The Passing of Intellectual Generations：Reflections on the Death of Erving Goffman, ” *Sociological Theory* 4, 1 ：106-113.

Durkheim, É., [1895]1938, *The Rules of Sociological Method*, translated by S. A. Solovay & J. H. Mueller and Edited by G. E. G. Catlin, The Free Press.

――――――, 1897, *Le Suicide：Etude de Sociologie*, Félix Alcan Éditeur.

Fararo, T. J., 2001, *Social Action Systems：Foundation and Synthesis in Sociological Theory*, Praeger Publishers.

Garner, R. & Hancock, B. H., 2014, *Social Theory－A Reader：Volume II*, The University of Toronto Press.

Goffman, E., 1953, “Communication Conduct in an Island Community, ” unpublished Ph.D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago.（URL：http://cdclv.unlv.edu/ega/documents/eg_phd.pdf）［2017年９月22日閲覧］.

――――――, 1956, *The Presentation of Self in Everyday Life*, University of Edinburgh, Social Sciences Research Centre.

――――――, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor.

――――――, 1961, *Encounters：Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company, Inc.

――――――, 1963a, *Behavior in Public Places：Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press.

――――――, 1963b, *Stigma：Notes on the Management of Spoiled Identity*, Aldine.

――――――, 1974, *Frame Analysis：An Essay on Organization of Experience*, Harper & Row.

――――――, [1981]2000, “A Reply to Denzin and Keller, ” in G. Fine & G. Smith（eds.）*Erving Goffman* [4], Sage.

Langham, I., 1981, *The Building og British Social Anthropology*, D. Reidel Publishing Company.

Manning, P., 1999, “Ethinographic coats and tents, ” in G. Smith（ed.）*Goffman and Social Organization*, Routeledge.

Murray, S. O., 1998, *American Sociolinguistics：Theorists and Theory Groups*, John Benjamins Publishing Company.

Parsons, T., [1937]1949, *The Structure of Social Action：*

A Study of Social Theory with Special Reference to A Group of Recent European Writers, The Free Press.

Raab, J., 2008, *Erving Goffman*, UVK Verlagsgesellschaft mbH.

Smith, G., 2006, *Erving Goffman*, Routledge.

Travers, A., 1999, "Non-person and Goffman," in G. Smith (ed.) *Goffman and Social Organization*, Routeledge.

Treviño, A. J., 2003, "Introduction：Erving Goffman and the Interaction Order," in A. J. Treviño (ed.) *Goffman's Legacy*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

薄井　明, 2011,「ゴフマン社会学の脱皮の跡―彼の修士論文（1949）に関する一考察―」,『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第18号.

――――, 2013,「ゴフマンの『隠れジンメリアン』疑惑―従来のゴフマン理解の見直し―」,『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第20号.

――――, 2016,「羽化したばかりのゴフマン社会学―第二公刊論文（1952）に関する一考察―」,『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第23号.

Winkin, Y., 1988, *Les Moments et Leurs Hommes*, Seuil/Minuit.

――――――, [1992]1999, "Baltasound as the Symbolic Capital of Social Interaction," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], Sage.

――――――, 1999, "What is a life? The uneasy making of an intellectual biography," in G. Smith (ed.) *Goffman and Social Organization*, Routeledge.

――――――, 2010, "Goffman's Greenings," in M. H. Jacobsen (ed.) *The Contemporary Goffman*, Routledge.

Winkin, Y. & Leeds-Hurwitz, W., 2013, *Erving Goffman：A Critical Introduction to Media and Communication Theory*, Peter Lang Publishing, Inc.

Wrong, D., 1990, "Imagining the Real," in B. M. Berger (ed.) *Authors of Their Own Lives*, The University of California Press.

――――――, 1994, *The Problem of Order：What Unites and Divides Society*, The Free Press.

――――――, 2011, "Bobby Adamson Said, "Pooky Is a Genius, and as Soon as He Starts Writing His Own Stuff It Will Be Recognized"," (URL：http://cdclv. unlv. edu/archives/interactionism/goffman/wrong_10. html) [2017年 9 月22日閲覧].

An Intellectual Biography of Young Goffman：His High School and University Days

Akira USUI*

Abstract：In St. John's Technical High School, Erving Goffman showed his exceptional excellence in science and mathematics, especialiy in chemistry, who was nicknamed a "math genius", or a "natural science genius". He entered the University of Manitoba in 1939, where he was a chemistry major in his first and second year, but he switched his major from chemistry to philosophy in his third year. He interrupted his education at the university next year, and started to work at the National Film Board of Canada in Ottawa. His leaving the university and working at NFB was probably for the purpose of evading military service. In those days A. N. Whitehead was a major influence on Goffman. Following D. Wrong's advice, then, Goffman enrolled at the University of Toronto, where his reading the books of É. Durkheim and T. Parsons gave Goffman a sociological perspective and Birdwhistell's kinesics as well as Freud's psychoanalysis cultivated his sociological eye for the social-stratificational and interpersonal significance of people's appearance and manner.

Key Words：Erving Goffman, Intellectual Biography, St. John's Technical High School, University of Manitoba, National Film Board of Canada, University of Toronto

＊Center for Development in Higher Education